

# 少年老い易く学成り難し

ご入学おめでとうございます。長く厳しい受験生生活を終え、晴れて大学生となられたみなさまを図書館は心から歓迎いたします。みなさんは若く、心身ともにエネルギーに満ち溢れ、生命はピチピチと飛び跳ねています。時間ははるか彼方まで続いているように見え、「世界」という劇場はみなさんの登場を待ち構えています。持ち時間など意識せずとも「セリフを覚える時間はたっぷりある」ように見えます。さて、みなさんは朝日が昇る様子、夕日が沈む様子を見たことがありますか?漆黒の中、微かな光が現れたかと思うと瞬く間に光が広がり、あっという間に日が昇ります。夕日も同じ。あたりを赤、橙、浅黄、青、紫に染め上げたあと太陽は一瞬にして消え去ります。これが地上の時間の速さです。

若い日の時間の過ぎ去り易さを戒める言葉に『少年老い易く学成り難し 一瞬の光陰軽んずべからず』という熟語があります。この後に『未だ覚めず池塘の春草 階前の梧葉(ごよう)已(すで)に秋声』と続きます。池塘春草(ちとうしゅんそう)の夢とは、若い頃の夢や希望を指します。人間の時間の速さは平等であり、得難くして失い易いものは時間です。学生時代はそれ以降の年代と比べると自分で自由に使える時間がある時代です。学びは一生といいますが、学生の本分の第一は学ぶことです。学生時代ほど学びに集中できる人生の時期はなかなかありません。学ぶのはあなた自身です。

図書館は平日朝早くから夜遅くまで開館しています。図書館をぜひ、あなたのキャンパスライフに組み込んでください。図書館を学修の場として使うだけでなく、毎日、図書館ホームページもチェックしてください。あなたのキャンパスライフにきっとプラスになる情報が溢れています。

(生田図書館事務長 高橋美子)

## 「図書館活用法」履修のおすすめ

学部の枠を超えて様々な講座が開設されている「学部間共通総合講座」の中に「図書館活用法」があります。この科目は明治大学図書館の基本的な使い方から、文献・情報の探し方とその検索結果を読み取るスキルを身につけて、みんなに図書館の蔵書を使いこなせるようになってもらうことを目的としています。

明治大学図書館は236万冊の図書、3万7千種類の雑誌、国内外の様々な外部データベース、電子ジャーナル、CD-ROMなどの膨大な学術資料を収蔵しています。

授業やゼミでレポートや論文を書くときには、これらの学術資料が大いに役立ちます。そして、膨大な資料の中からより迅速に、より効率的に必要とする資料を入手し、適切に利用するためには、「図書館活用法」で得た知識やスキルが心強い味方になります。授業では技術的なスキルアップだけでなく、レポートや論文の作成法や、インターネット情報の特性や問題点、読書の愉しみ、図書館と著作権といった幅広いテーマについて講義します。

有意義な学生生活を送るために図書館を上手に利

用して身近な場所にすることが大切です。「図書館活用法」の履修がそのきっかけになるでしょう。

授業スケジュールや詳しい内容については「学部間共通総合講座」のシラバスや図書館のホームページにもありますのでご覧ください。

### 「受講者からの感想」(2013年度前期受講者アンケートより)

- 目的の本をスムーズに探せるようになった。
- 1年生として、図書館の利用法をここまで深く知ることが出来たと言うのはとてもよかったです。
- 入学したての頃は図書館の使い方が全く分からなかったのですが、授業を受けてから本を探すのが早くなりました。
- レポート・論文の書き方と著作権(引用の仕方)はここで教わらないと知る機会が意外となく、知らず知らずのうちに盗用、ということになりましたがねなかったと思うので役立った。
- 文献の探し方の回では、知らないければ使わないであろう検索法を学べ、もの調べの幅が広がった。

## 図書館で孤独になりなさい

農学部教授・松下浩幸

大学院時代の恩師の一人が、入学したばかりの私たちに、次のようなアドバイスをしてくれた。「時間があったら図書館へ行きなさい。そして、棚に並んでいる本を一つずつ手に取り、そのタイトルを覚えなさい。図書館に並んでいる本のタイトルと場所を覚えること。それが研究の第一歩だ。」と。

本のタイトルは、今なら簡単にパソコンで検索できるが、しかし今も、あの時、恩師が言った助言は有効だと思う。実際、当時も今も、私は図書館に行き、一冊一冊の本のタイトルを覚えるたびに、目の前の視野が広がっていくように思う。それはおそらく、形のないインターネットの検索では味わえない悦びだろう。もちろん、タイトルを覚えるだけでなく、その本を読むことが重要なだけではなく、本のタイトルを見るだけでも、大いに勉強になることを私はその時に知った。

一冊の本に出会うことは、世界への通路を一つ手に入れることに等しい。言うまでもなく、世界への通路をたくさん持つ者は、それだけ自分を自由にできる。本を読み、そして考えることは、大学の成績を良くすることや、資格試験に合格するといったような、あえて言うなら、そんな小さなことではない。制約の多い現実の中で、いかに自分を自由にするかという、〈知〉を用いた戦いだ。

ミヒヤエル・エンデのファンタジー小説『はてしない物語』は、デブでのろまな、いつもいじめられていた少年バスチアンが、本の中の世界「ファンタージエン」の中を冒険し、本当の自分を探す物語だが、彼にとって本の世界を体験し、そこを通過することは、まさに自分が自由になるための戦いだった。ただ、この自由になるための戦いに参加するには、一つだけ条件がある。それはバスチアンが、たった一人で本の中の世界へ入っていったように、われわれもまた一人でしか、その世界へ入って行くことはできないということだ。本を読み、自分を自由にするための戦いには、友達や家族を連れていることはできない。なぜなら、人が成長するためには、孤独になる必要があるからだ。孤独と向き合うことによって、人は初めて自分を取り巻く世界について考えることができる。

「自分自身に出会いなければ、世界の果てまで目を注げ。世界を認識したいなら、自分の心の深みに探せ」。これはオーストリア出身の思想家ルドルフ・シュタイナーの言葉だが、われわれは自由になるために、世界の果てまで目を注ぎ、同時に自分の心の深みを見つめなければならない。図書館はそのためにもっともふさわしい場所だ。図書館で孤独になりなさい。そして自由になりなさい。自分だけの「はてしない物語」を作るために。



孤独について考えるための8冊